

熊野市の新たな特産品として期待される「アシタバ」の栽培技術の検討

三重大学大学院生物資源学研究科 附属紀伊・黒潮地域FSC技術部 樋口 伸一
 三重大学大学院生物資源学研究科 梅崎 輝尚
 東紀州サテライト 産学官連携アドバイザー 山本 浩和
 関係団体: (NPO法人 あそぼらいつ) 谷 賢一

活動の概要

熊野市では「明日葉」を特産品として栽培し、地域おこしへ活用する動きが始まっている。しかしながら、発芽率が悪く十分な苗数を確保することが困難など明日葉の栽培技術が確立されていない。

そこで熊野市での栽培技術の確立に向け、八丈島の栽培現場を調査し、栽培の改善を目指す。さらに、他品目で実施されている崔芽処理の試験を行い、短期的・均一な苗の確保を目指す。



(八丈島産播種苗)

活動の内容

1) 熊野市での管理方法の聞き取り調査

2020年秋に播種(八丈島産)した苗及び八丈島産1年苗を2021年4月に定植、6月末まで順調に生育していたが7月から8月の天候不順(高温・多湿)により多く枯死し壊滅状態となった。

これは、明日葉の産地である八丈島は海洋性気候で夏場の気温も熊野ほど高くなく、土壌も火山灰で排水性も良く、熊野市の圃場条件に適さなかったためと考えられる。



(2021年6月頃)

2) 農場等での試験栽培

熊野市で育苗した播種40日前後と2年目のポット苗を6株ずつ2000分の1aワグネルポットに移植し、遮光性のある網室に入れ春まで栽培し、その後半分は外で栽培するなど生育状況を観察した。



(網室のポット)



(外のポット)

(結果)

熊野地域と同様に高温・多湿となる津市内(三重大学内、附属農場)においてポット栽培を行った結果、葉の衰弱が一部にみられたものの、根は確実に成長した。

3) 発芽試験

金山圃場の種(日なた、日陰)、熊野市現地の種合計3種を以下の処理区で20粒ずつ播き、約30日栽培した。15℃一定に保ち、乾燥しないようにシャーレをラップまたは蓋で覆った。光の照射は行わなかった。

処理区名	処理の内容	ねらい
無処理	無処理	吸湿
浸漬処理	24時間水に浸漬する	吸湿
種皮カット	種皮の一部に切れ目を入れる	吸湿
真空処理	真空状態にして吸水させる	吸湿
低温処理	2週間冷蔵庫(5度)に入れる	休眠打破



(発芽試験の様子)



(発芽時)

(結果)

現地(7割) > 日なた(4割) > 日陰(2割)の順に30日目発芽率が良かった。

発芽日数は品種、条件関係なく、10日前後で最初に発芽した。処理区にある休眠や物理的な破壊にも明確な傾向はみられなかった。酸素、光が必要条件でないことも含め乾燥させないことが最も重要であると考えられる。

土に播く際には、十分に土に水分を含ませ、発芽するまで乾燥しないようにする必要がある。種の熟度、保存状態による乾燥状況で発芽率に差がでている可能性がある。

4) 八丈島の栽培現場での聞き取り調査と簡易調査

新型コロナの影響により八丈島への訪問が困難なことから2021年度は中止した。